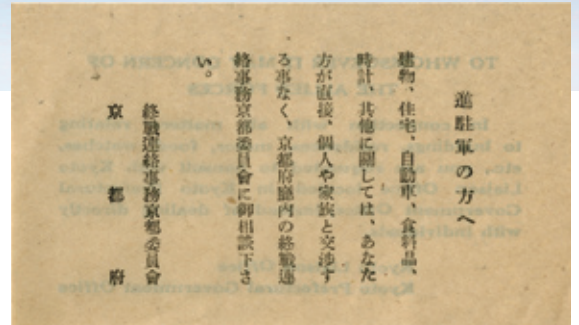


立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●



スポット

2

ミュージアムの収蔵品64

進駐軍の方へ

巻頭
つれづれ

3

『昴』を深読みしました

立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長

安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

環境観測と平和維持の関係

館長だより

5

～「ティッピング・ポイント」と「強靱力」の概念を起点にすると～

立命館大学国際平和ミュージアム館長

モンテ・カセム〔立命館大学政策科学部教授、立命館理事補佐〕

ここが
見どころ

6

平和への努力

立命館大学国際平和ミュージアム副館長

山根 和代〔立命館大学国際関係学部准教授〕

運営委員
リレー連載

7

終わりのなきテロ？

立命館大学国際平和ミュージアム運営委員

市村 真希〔立命館大学情報理工学部講師〕

ミュージアム
おすすめの
一冊

8

長沼 毅 著

『辺境生物はすごい！』 (幻冬舎 2015年7月刊)

立命館大学国際平和ミュージアム運営委員

永浜 明子〔立命館大学スポーツ健康科学部准教授〕

ミニ企画展示

9

開催報告 (2015年10月～2016年1月)

事業報告

10

- 国際平和ミュージアムの授業利用状況
- 平和の缶バッチプレゼントキャンペーンについて
- 2015年度 秋季特別展 戦後を語る70のカタチ
- 世界平和アピール七人委員会 2015年講演会
- 第22回日本平和博物館会議参加報告
- 2015年度 第2回NGOワークショップ
- 第62回「わだつみ像」前集会

17

- 立命館附属校平和教育実践展示に関わって
- 韓国ノグンリ平和記念館との学術交流協定締結の調印式と記念講演会
- 世界の平和博物館の紹介
- ボランティアガイド活動日誌
- 平和へのメッセージ
- 2015年度入館者状況 (2015年4月～2015年12月)、編集後記
- ミュージアムインフォメーション



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

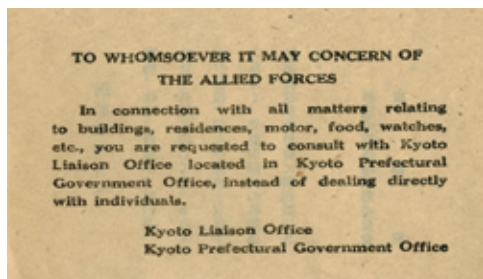
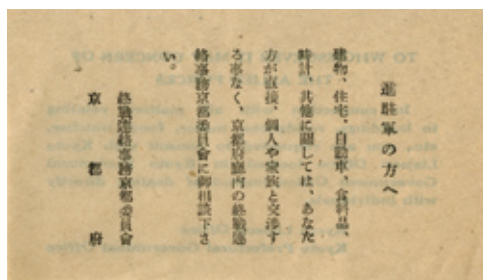


立命館大学

国際平和ミュージアム

Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

進駐軍の方へ



1945年 6.1cm×10.7cm

1945（昭和20）年8月15日のラジオ放送で日本がボツダム宣言を受け入れたことが伝えられ、国民は敗戦を知りました。連合国軍は放送以前に、日本側が宣言の受け入れ交渉を進めていることを国民に知らせ、戦意を挫いて、戦争の終結を早めるため、これを記した伝単を京都をはじめとした日本の都市に空から撒いていました。

戦艦ミズーリでの降伏文書への調印は9月2日でしたが、8月末から連合国軍の先遣隊による進駐が始まり、8月26日には終戦連絡中央事務局が設置され、9月6日の閣議決定で終戦連絡地方事務局の設置も決まり、7日には終戦連絡事務京都委員会第一次会が京都府庁で開催されました。「終戦連絡事務京都委員会」はこのときにつけられた名称です。そして、22日にはこれが発展して「終戦連絡京都事務局」が設置されました。

京都に占領軍が進駐してきたのは9月25日でした。市内の主要な建物は接收され、1938年建設の近代建築であった丸紅ビル（現在はCOCON烏丸）が司令部となりました。烏丸丸太町には司令官宿舎、植物園には占領軍の住宅地区が作られ、河原町や祇園にはキャバレーやダンスホールなど、占領軍相手の娯楽や慰安施設もできました。

終戦連絡地方事務局の役割は、占領軍と現地との間で生ずる様々な問題に対処して占領を円滑に実施させることにあり、活動の要点は主に、①建物の接收や労働力の提供など進駐してきた「米軍側からのさまざまな要求に応ずることやそのための事務処理」、②占領軍と日本人

の間で起こる「さまさまの軋轢・紛争の解決をはかっていくこと」、③「民需産業転換許可と賠償指定解除の取り付け」、④「食糧配給問題を含む治安問題」の解決でした。（赤澤）

この資料は、占領軍が個人的に住宅や自動車、更に食料や金品を個人から巻き上げないように、接收に関して終戦連絡事務委員会が把握できるよう制作されたものであり、「終戦連絡事務京都委員会」の名義から、制作されたのは戦後比較的早い時期と推測されます。

名刺程度の用紙の片面は英語、片面は日本語で以下のメッセージが印刷されています。

進駐軍の方へ

建物、住宅、自動車、食料品、時計、其他に関しては、あなた方が直接、個人や家族と交渉する事なく、京都府庁内の終戦連絡事務京都委員会にご相談下さい。

終戦連絡事務京都委員会
京都府

TO WHOMSOEVER IT MAY CONCERN OF THE ALLIED FORCES

In connection with all matters relating to buildings, residences, motor, food, watches, etc, you are requested to consult with Kyoto Liaison Office located in Kyoto Prefectural Government Office, instead of dealing directly with individuals.

Kyoto Liaison Office
Kyoto Prefectural Government Office

内容は同じですが、英文では、requested to consult withと「要請」しています。食糧や時計を奪われる狼藉に対しても、占領軍に対しては京都府にこれを禁じて取り締まる権限が無いことも表れていますが、制作の目的は、占領軍と日本人の間の摩擦を解決することであり、軍事占領を受ける人々の生活を守ることを目指すと同時に、占領政策が円滑に運ぶための協力の姿勢でもありました。

（学芸員 兼清順子）

参考文献

江藤淳編,1982,『占領史録第4巻日本本土進駐』講談社。
赤澤史朗,1996,『占領軍と京都』『立命館法學』6(250)。

『昴』を深読みしました

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安 斎 育 郎

(立命館大学名誉教授)

■ 谷村新司『昴』考

2015年12月、兵庫県川西市の生涯教育事業として「安斎育郎が語る歌謡曲と時代と人」という連続講座を受け持ちました。受講生は60代～80代で、戦後70年目の年に、お馴染みの歌謡曲を切り口に改めて戦後という時代を考えてみるのが狙いでした。

取り上げた曲は、若い人はあまり知らない古い歌です。

○第1回：『憧れのハワイ航路』

(1948年、石本美由紀・作詩、江口夜詩・作曲、岡晴夫・唄)

○第2回：『長崎の鐘』

(1949年、サトウハチロー・作詩、古関裕而・作曲、藤山一郎・唄)

○第3回：『昴』

(1980年、谷村新司・作詩・作曲・唄)

『憧れのハワイ航路』と『長崎の鐘』は、日本国憲法が成立してすぐの頃の歌で、日本が連合軍総司令部（GHQ）の支配下にあった時代です。講義では、これらの歌の作曲家の戦時中の生き方も含めて、「人の生き方を通じて時代を描く」よう試みました。例えば、作曲家・古関裕而さんは、『露営の歌』『弾雨を衝いて』『愛國の花』『暁に祈る』『海の進軍』『英国東洋艦隊壊滅』『断じて勝つぞ』『防空監視の歌』『大東亜戦争陸軍の歌』『大南方軍の歌』『海を征く歌』『戦ふ東條首相』『かちどき音頭』『決戦の大空へ』『若鷺の歌』『撃ちてし止まん』『バラウル海軍航空隊』『制空戦士』『雷撃隊出動の歌』『臺灣沖の凱歌』『フィリピン沖の決戦』『嗚呼神風特別攻撃隊』『比島決戦の歌』など沢山の軍歌を作りましたし、また、江口夜詩さんも『十九の春』や『赤いランプの終列車』などの歌謡曲の一方で、『軍事探偵の歌』『初陣の歌』『月月火水木金金』『轟沈』などの軍事歌謡を作りました。戦後しばらくの頃は、こうした作曲家が、GHQの占領政策に許容され、歓迎される範囲で楽曲を作った時代とも言えます。空襲や原爆で地獄を体験した人々の間に反米意識が高まって不思議はない時代でしたから、GHQは流行歌に

も監視の目を光らせていました。そんな時代に『憧れのハワイ航路』はアメリカにとっても好都合だったでしょうし、『長崎の鐘』が原爆の地獄絵とは対極にあるような美しい曲調にのせて「慰め」や「励まし」を歌い上げたのも好ましかったでしょう。

■ 谷村新司『昴』考

しかし、本稿で紹介したいのは第3の課題曲『昴』です。「目を閉じて何も見えず」と歌い出し、「さらば昴よ」と歌い上げるこの曲は、今でもカラオケのトップランクを誇っています。

この曲は1980年に作られましたが、作者の谷村新司さんによれば、プレアデス星団（和名：昴〈スバル〉）の輝きから死滅への天体ドラマに仮借しながら、実は、「目に見えるモノに縛られる物質的な生き方に別れを告げ、目に見えないモノを大事にする精神的に豊かな生活を選ぼう」という「価値観の転換をテーマにしたもの」だということです。詞が石川啄木の『悲しき玩具』（眼閉づれど 心にうかぶ何ものなし／さびしくも、また、眼をあけるかな…）と酷似しているとか、曲が軍歌『加藤隼戦闘隊』に酷似しているといった指摘がありながらも、「日本を代表するポップスの名曲」とも評され、年末恒例の「NHK紅白歌合戦」でもたびたび唄われ、2010年上海万博の開会式では谷村さん自身が歌い上げました。

さて、いったい私は川西市の生涯教育講座で、この歌をどう論じたのでしょうか？

講義資料には、次のように書いてあります。

「直接の題材はプレアデス星団の輝きから死滅への天体ドラマに仮借しているが、石川啄木を食べながら青春期を送った詩人・谷村新司が、ネオン輝く繁華な時代に忍び寄り陰りのような雰囲気を感じて嗅ぎ取って呟いた叫びではなかったか？60年代の経済成長期を反映する大阪万博の喧騒で始まった70年代が、第4次中東戦争によるオイル・ショックや世界的スタグフレーションで低迷期に入り、ベトナム戦争に勝てなかった超大国アメリカに陰りが見え始め、その一方で、石油

危機を契機に推進された原発がスリーマイル島原発のメルト・ダウンで世界に衝撃を与える—そんな時代だった。音楽活動の面では、高校時代から取り組んだロック・バンドの後に“アリス”を結成し、フォーク・シンガー路線から次第にロック風に曲調を変えながら、自らはシンガー・ソング・ライターとしてのソロ活動で光を浴び始め、“アリス”としての活動を1981年には停止するに至る—『昴』が発表された1980年は、そのような時期と重なっている。不確かな時代状況を見立て、自らの音楽履歴を中間総括するような時期に、この歌は創られている。“さらば昴よ”という言葉は、時代を照らしてきた輝く巨星に陰りが見え始め、時代を支配する価値観の転換が起こりそうな予感の中で、それまで君臨してきたものに決別し、不透明な時代への不安を抱きながらも、熱い心をたぎらせつつひたすら歩み続けていく—そうした“決意”を象徴する言葉だったかもしれない。

これは私の一つの『昴』論に過ぎませんが、こう書きながら、心の中では、私自身のあの時代の生き方と重ね合わせてこの歌を解釈する作業が進んでいました。

私は1970年代初頭から、当時国策として推進されつつあった日本の原発政策を批判し、「反国家的イデオログ」と見なされていました。研究・教育業務から外され、厳しく監視され、ネグレクトされ、罵倒され、村八分状態に置かれていました。とくに、科学者の公的代表機関だった日本学術会議の史上初の原発問題シンポジウムで「6項目の点検基準」を提起した1972年12月5日から、アメリカのスリーマイル島原発が従来の軽水炉事故の包絡線を越える炉心熔融事故を起こした1979年3月28日までの期間は、アカデミック・ハラスメントが厳しかった時代です。だから、「さらば昴よ」は、私にとっては、次のように感じられたのです。

「1979年3月28日、アメリカのスリーマイル島原発が、“軽水炉開発史上の事故の包絡線を起える”深刻な炉心熔融事故を起こした。やがて、教授室に私を呼んだ主任教授は、“君と僕とは生涯良い論敵でありたい”と言った。私に対する風当たりは1973～1979年のような“冴びゅうびゅう状態”よりはマシになったが、1980年、私の東大助手生活は10年目に入っていた。ろくな研究条件も保証されていなかったから、東大では大した研究は出来なかった。人生の活路を見出そうといくつもの大学の人事に応募したが落とされ続けた。そして、1986年、やっと立命館大学経済学部“自然科学概論”

担当教授として採用され、90年代以降の平和研究者としての新たな旅立ちへの道が拓かれた。だから、私にとって“さらば昴よ”は、国策に寄り添っていた東大時代の権威への“さらば”に外ならず、私が“心の命ずるままに蒼白き頬のままで歩んだ道”が、この国の将来のより安全なあり方に通じる道であってくれればと、相変わらず蒼白き頬のままで歩み続けている」。

いま、毎月福島通いを続け、放射線防護学の専門家として被災者の不安や悩みに可能な限り寄り添おうとしているのは、私の中に贖罪と責任の意識が抜きがたく残っているからに他なりません。福島原発事故から5年を経て、なお目の前にある深刻な事態に、私は改めて、「蒼白い頬のままで歩み続けよう」と決意しています。そして、毎月、私の手元にあるたくさんの写真や図表を30枚程度のパネルにまとめ、移動展示が出来るようなパネル・セットを作りたいと、構想を温めています。実は、「平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）」のニュースレター第13号でこの構想について記事を書きましたので、もう後には引けません。私は「自分を追い込むタイプ」に相違ありません。



雪のタワーをつくる子（福島県川俣町、2015年12月）



汚染調査のために土を採取する（福島県浪江町、2015年10月）

環境観測と平和維持の関係 ～「ティッピング・ポイント」と「強靱力」の概念を起点にすると～

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 モンテ・カセム

(立命館大学政策科学部教授、立命館理事補佐)

大災害と名付ければ浮かんでくるイメージは被害者の数の多さ、それに関連する悔みと建造物の破壊、緊急対応・復興・再建の大変さ及びかかるコストと時間、労力と知恵と言えよう。急に起きるものであり、人的も環境破壊の上も悲劇としか語れないものである。「東日本大震災」いわゆる「3.11」の巨大地震・大津波と二次災害の火災等の影響や福島第二原発での放射能事故はこのタイプの災害といえる。この大災害の後、特に応急、復興および再建対策の現場では地域社会の強靱力はなんであるのかを問い始めた。平和構築の現場で似ている例を探せば、先日この世を去ったブートロス・ブートロス＝ガリ氏は国連事務総長の時代にルワンダとソマリアの国境あたりで起きた大虐殺と言えるかもしれない。このようなドラマチックな災害・被害は「ラピッドオンセット型」の例と言え、我々が同情しやすいものである。

だがゆっくり変革し、気づかないうちに危険度が一定のところに至ってしまうと想像できないスピードで崩壊し始める現象も自然界に見える。ある生態系内の生物種を一つ一つ取り出すと微妙な変化しか見えないで平行点を取り戻す強靱性の範囲内のケースは多い。だがある生物種をその環境から取り出すと驚くべき速さで生態系内で大量に生物死の発生や生物種の絶滅と生態系そのものの崩壊が現れる場合がある。この破壊のきっかけになった生物種を「基幹生物種（英：Keystone Species）」と呼ばれている。気候変動も同様な現象だが、もっと長い時間軸で起きているものである。

時間軸で見ると1万から1万2千年前にさかのぼると最後の氷河期が終わりかけて古生物学的に言うところ「完新世（英：Holocene）」に入る。「完新世」は非常に安定した気候を呼び寄せた期間であり気温の変動がプラス・マイナス1度程度であったことによって定置農業が可能になったり、生物の多様性が地球上、特に熱帯雨林やサンゴ礁の生態系で大幅に増えたりした時代が続いた。氷河期から変容した過程では絶滅に向かった生命体と得した生き物があり動物の世界ではマンモスが前者の例であり人類「ホモ・サピエンス」は後者の例だと言えよう。数多くの生命体には揺籠のような環境だったが18世紀の産業革命以降変化が始まる。それまで大気内の二酸化炭素の濃度は280ppm(容量)で安定していたが第二次大戦の終戦後、320ppmまで上がっていた。21世紀の初頭、390ppmに移行するあたりで気候変動は重大な問題だと科学界のみならず一般社会の方々も認識し始める。2013年以降は400ppmを超え大気内の二酸化炭素の濃度が急増している。このように数百、また数千年の単位で危険が増大する災害を「スローオンセット型」と呼ばれている。

北極と南極の氷山やヒマラヤ山脈等の雪が大量に溶け始める450ppmは避けるべき起点だと指摘されている。地球の平均気温は「完新世」平均より2度以上上昇すれば人間社会の強靱力を超える可能性も指摘されている。海の水位の上昇だけではなく地球の気候を安定させている熱交換機能をはたしている北大西洋深層水（英：North Atlantic Deep Water）の流れの変化によって今でも見え始めている異常気象が深刻になり、たどり着く新平行点は人類にとって喜ばしいものか悲しませるものかは誰も読めないが、そこに至るまでの移行期は不安の多い時代になるだろうと言えよう。以前述べたKeystone

Speciesを抜き出すことによって、生態系は崩壊する危険と同様なことが起こり不利な方向へ急に向かわせる起点を「ティッピング・ポイント」と呼ばれている。地球システムや生態系の強靱力を超えた時点ともいえよう。だから「スローオンセット型」であろうか「ティッピング・ポイント」を超えると大災害を急に招く危険度が増してくる。だが、それを避けるための合図はいくつかの時点で現れ、それを無視すると大災害に至ると言える。

「完新世」の安定していた地球環境が不安定の時代に入る原因として人間社会の福利厚生の上に向かった行動があげられる。というのは、この安定感に得した人類の行動によって大気で二酸化炭素が急に上昇し自分の首を絞める様な状況と呼び寄せている。この時代のことをノーベル化学賞受賞者ポール・クルツゼン（Paul Crutzen）が「人新世（英：Anthropocene）」と名付けた。つまり、今2ppmで上昇している二酸化炭素の容量ベースの濃度で人口大国中国、インド、インドネシア、ブラジル等新興諸国の福利厚生の上を従来の開発過程の延長線で求めることの限界が見えている。この限界を「地球の臨界領域（英：Planetary Boundaries）」として地球の安定に危険を与えている9つの指標で計算された結果をストックホルム大学のレジリエンス研究所（英：Stockholm Resilience Center）のヨハン・ロクストローム教授の研究で発表されている。ロクストローム氏の分析では気候変動は不安定な「イエローゾーン」であり、生物多様性の損失及び窒素とリンの循環性は危険な「レッドゾーン」にある。「レッドゾーン」に入ると「ティッピング・ポイント」に近づき「スローオンセット型」は「ラピッドオンセット型」と同様の災害を招く。

近年のフィリピンで異常気象による強風、大雨、洪水及び土砂崩れ等で起きた大災害はその例ともいえよう。また2006年にシリアに起きた干ばつによって水不足の農民が大量に都市へ流れ込み生活の不安が政治的不安につながり、今日ヨーロッパに流れている難民問題の原点と言われている。2003～2009年の間、衛星観測機「GRACE」によるとトルコ、シリアとイラク及びイランの西部地域で北部インドを除いて地球上最も地下水が減っていた地域だとわかる。「スローオンセット型」災害は地球環境に影響を与えるだけではなく人間の社会構造にも不安材料を与えてしまうことになる。小泉首相の時代には中東への開発協力の一環としてヨルダン川の流域の国々が共同で水の安定供給を図り農業の発展に日本が協力をすることを約束した覚えがある。なぜその提案を速やかに実現できなかったかは分かりかねるが、もしそれによってシリアや隣国の社会的ストレスを和らげることができていれば今テレビ報道で見る難民問題避けることができたかもしれない。

つまり不安定の「人新世」で出ている地球環境に関する危険信号に注意を払うと「ティッピング・ポイント」に至る前に自然環境のみならず人間社会に対して大きな被害を避けることができる。大災害時には社会的弱者の人権と身の安全を保障することの困難を考えると、環境観測による情報分析は強靱力を超える起点の社会的ストレスの「ティッピング・ポイント」に関する「アーリー・ウォーニング・システム」になり、平和維持にも大いに役立つものと言えよう。

平和への努力

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 山根 和代

(立命館大学国際関係学部准教授)

国際平和ミュージアムには国内だけでなく、海外から訪問者があります。国内の訪問者からは、「教科書で習わなかったことを学ぶことができた」という感想があり、日本の戦争の加害の展示を指すことがあります。また海外の訪問者は、「自国の恥を博物館では隠したが、このミュージアムでは日本の侵略やその結果多くの人々が苦しんだことを正直に展示していて印象的である」という意見があります。さらに中国や韓国の訪問者は「日本で戦争に反対した人がいたことを、初めて知った。日本人はすべて戦争に賛成していたと思っていたので、驚いた」という感想もありました。

地階の展示室には、平和への努力や反戦運動に関する展示があります。戦争中反戦活動は弾圧されたため、国内での活動が困難でした。そのような中で、中国で反戦活動をした長谷川テル、アメリカで反戦活動をした石垣栄太郎・綾子夫妻などが紹介されています。長谷川テルは中国の留学生と結婚し、中国で日本の侵略に反対し、エスぺラントを使ってファシズムを批判しました。また石垣綾子は1926年米国に渡り、反戦・社会運動に参加しました。戦争中は、日本兵に対して反戦の呼びかけ運動を行い、米軍に協力して夫と共に戦時情報局でビラの作成にも関わりました。このような反戦・反軍・平和の姿勢を貫いた人々についてもっと知りたい方は、『日本平和論大系』（家永三郎編集、日本図書センター 1993）を読むことをお勧めします。

また日系アメリカ人のカール・ヨネダが1944年7月に北ビルマで日本兵に降伏を呼び掛けている写真もあります。カール・ヨネダはアメリカで生れ日本で育った帰米二世でしたが、反戦運動、労働運動において国際的に活躍しました。

国内で戦争に協力しなかった人として、『他山の石』の桐生悠々や『近きより』の正木ひろしなど、個人雑誌を発行して戦争批判の考えを伝えようとした人が、展示で紹介されています。日本では兵役拒否の権利が認められていなかったため、戦争に反対した人は刑務所か精神病院へ入れられました。当時のこのような状況は、『永遠の都』（加賀乙彦著）という長編小説に描かれています。現在は「平和への権利」の重要性が、国際的に認められてきています。参考になる本として *The Emerging Right to Peace: Its Legal Foundations* (Carlos Villan Duran 著、2014) がありますが、兵役を拒否する権利についても書かれています。

日本における「ファシズムに反対する活動」を紹介した展示も地階にあります。ドイツ占領下の反ナチス抵抗運動の紹介をしています。確かにヨーロッパには、

反戦博物館、平和博物館以外に抵抗博物館が数多くあります。著者は以前ヨーロッパの様々な平和のための博物館を訪問しましたが、抵抗博物館はドイツのベルリン、フランスのリヨン、オーストリアのウィーン、ノルウェーのオスロ、オランダのアムステルダムやゴータ（ハウダ）などにあります。ここではオーストリアにある抵抗博物館の写真を紹介しますが、ナチスに抵抗した人々の写真が展示されています。

このような反戦活動やナチズムへの抵抗運動に関する展示をきっかけに、戦争の背景や原因について知ることが重要であると思います。一見平和に見える現在の状況を、歴史の流れの中で見ていくと果たして今本当に平和なのか、安保法制、特定秘密保護法ができた中で今後戦争が起こる危険性があるのかなど、考えさせられるきっかけになると思います。また日本平和学会の「安保法制100の論点」も、参考になると思います。

(<http://www.psaj.org/安保法制100の論点/>)



カール・ヨネダなどの展示



ナチスに抵抗した人々の展示 (Resistance Archive)

終わりにきテロ？

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員 市村 真希
(立命館大学情報理工学部講師)

はじめに

「テロ」という暴力はいつまで続くのでしょうか。自爆テロや射撃による無差別な殺傷などの暴力の行使は、平和に生活している人々に大きな恐怖・不安をもたらします。新年に入って、1月12日、トルコのイスタンブールで自爆テロと射撃事件によってドイツ人観光客を含む12人が死亡し、15人が負傷するなど多数の人々が犠牲になりました。事件現場は東ローマ帝国時代の太聖堂アヤソフィアの近くで、多くの観光客が往来しているところです。私も企業に勤めていた時に仕事でイスタンブールに何度も訪問したことがあり、今回のテロは他人事とは思えません。

テロの近くを駆け抜ける

振り返ってみれば、これまで私は多くのテロ事件の近くを駆け抜けてきたように思います。二つのテロ事件は忘れられません。

最初は、2001年9月11日、あの恐るべき「アメリカ同時多発テロ事件」でした。私は立命館大学理工学部機械工学科を卒業し、語学留学のためアメリカに滞在していました。事件発生時、私はニューヨークから遠く離れたボストンの公共図書館にいましたが、急に騒がしい館内放送（退館を指示するものだったと思われる）が流れたかと思ったら、何人もの警察官が入ってきて、訳も分からず追い出されました。外に出ると至る所にバリケードテープが張り巡らされ、普通ではない雰囲気を感じ取り、帰宅したことを覚えています。当時は英語が全くできなかったため、テレビを見てもテロ事件だとは理解できず、大変な事故が起きたのだと思いながら日本にいた母に電話をして初めてテロ事件であるということを知りました。私はその少し前の8月31日、今はなきワールド・トレード・センターのツインタワー前で記念写真を撮っていました。

次は、2005年7月7日、「ロンドン同時爆破テロ事件」でした。当時私はロンドンの大学院に在学していました。その日現場近くに居合わせたわけではありませんが、爆破のあった3か所は日常生活でも訪れることのある、よく知っている場所であったため、ニュースを聞いて不安と恐怖を感じたことを今でも覚えています。また、ロンドン市民のインタビューで「いつものように生活する。テロには屈しない。」という言葉が何度も聞いたことを覚えています。

2013年5月、母校に戻りました。2015年1月7日にパリで「シャルリー・エブド襲撃事件」が起こり、翌2月に実施が決まっていた学生のパリ研修のために急遽学生を引率することになりました。パリの街中には多くの警察や憲兵隊が配備されていました。ともあれ無事に帰国でき、学生のご家族も安堵されたことと思います。さらにまたパリでは2015年11月13日「パリ同時多発テロ事件」が起こりました。これまでにパリに何度か訪問する機会があり、好きな都市でもあり、これらの事件も（今はパリから遠くにいるのですが）他人事とは思えません。

現在、ヨーロッパの各地、各都市では、テロを警戒して非常事態の体制を取っており緊張した毎日を送っています。とはいえテロの話題もなかった15年前のパリでは、主な観光地（エッフェル塔・ルーブル美術館）や、国鉄の主要駅（東駅・サン＝ラザール駅構内など）をフランス軍兵士数人が武装して巡回していたのですが、現在では各都市のいたるところで各国軍の兵士が警備している状況になってしまいました。彼ら将兵や警察官の姿は、平和な時代の日常生活では決して尋常とは言えません。21世紀は平和を祈願する世紀になってしまったのでしょうか。

テロではなく、テロに代わる方法を見つけたい

私はテロという暴力に代わるもっともっと平和的な手段によって自分たちの主張を展開できる方法を見つけてほしいと思います。しかしイスラム過激派のどまるところを知らない蛮行を見れば、対話など不可能でしょうか。確かに、イスラムのテロリズムはすでに長い歴史があるのです。

「パレスチナのなかにハマス（「イスラム抵抗運動」と呼ぶ武闘派がインティファダ（1987）の抵抗のなかから派生しました。この組織はオスロ合意を破壊するために、イスラエルとパレスチナ自治政府の双方に対して絶望のテロリズムを展開するようになりました。テロリズムはイスラエルのなかにも対抗的な暴力の跳梁をよびさします。」（藤村信『中東現代史』岩波新書、1997、p.218）

対話と議論を重視するヨーロッパ諸国とイスラム過激派とが新しい世界に進む努力を重ねていただきたいと切に望んでおります。

『辺境生物はすごい！—人生で大切なことは、すべて彼らから教わった—』

長沼毅 著 (幻冬舎 2015年7月刊)

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 永浜明子

(立命館大学スポーツ健康科学部准教授)



最近、本のタイトルに「すごい！」と書かれていると、つい惹かれて手に取ってしまう。どれほど「すごい！」ものなのかと気になってしまうからだ。そうして、今回手に取ったのが、『辺境生物はすごい！』という本だった。国際平和ミュージアムと辺境生物のすごさ、どこに接点があるのか不思議に思われるかもしれない。しかし、読み進めていくにつれ、辺境生物が多側面で「すごい！」と感じずにはいられなくなる。その生き方

は、現代社会における我々の生き方に警鐘を鳴らしているようにも思えてくる。私たち人間はいかに同一方向を向き、右に倣えを良しとする世界に生きているのだろうか。そんな疑問を投げかけてくれた生物の生き方を3つ紹介したい。

1つ目は、チューブワームである。この生物には、口も消化器官も肛門もない。そうすると、動物ではなく植物ではないかと思われるが、住処は海底火山周辺で、太陽光は届かない。すなわち、光合成はできないため、チューブワームは植物とは言えない。餌をとるために移動できないチューブワームは、自身の体内にいる微生物から栄養を得て生きているのだ。そんな不可思議なこの生物の寿命はなんと250年以上もあるというのだ。

ふと…

あれ、どうして、一生懸命、「早く・速く」に重きを置いて生活しているのだろうか。どうして、いつも時間に追われているのだろうか。子どものころは時間なんて気にせず走り回っていたはずなのに。ただ、一生懸命することが楽しかったはずなのに。いつのまにか、「早く・速く」と効率の良さを重視した方向へとシフトしていた。なぜ「早く・速く」する必要があるのだろうか。なぜ、効率よくする必要があるのだろうか。なぜ、そうではない人は生きにくいのだろうか。

2つ目は、ミツクリエナガチョウチンアンコウである。この生物の雄は、雌の10分の1の大きさしかなく、なんと生殖の時に雌の腹部にひっつくのだ。その後、雄は雌の身体に固定され、雌の皮膚から伸びた血管から栄養を得る。しかし、雄の体は徐々に雌の体に吸収され、最後には生殖に必要な精巣だけが残る。

ふと…

この状態は人間界でいうところの「ひも」である。「ひも」という言葉はいい意味では使われず、蔑みや侮辱を含むことも多い。しかし、チョウチンアンコウの雄の生き方は、実に生を全うしている。雌にひっつかずに過ごす選択もあるが、それではすぐに死んでしまう

のだ。それならば、雌にひっつき、精巣だけになったとしても子孫を残す。当然のライフスタイルなのかもしれない。なぜ人間界の「ひも」と呼ばれる人は、肩身の狭い思いをするのだろうか。なぜそのような生き方が許されないような、目に見えない外からの働きかけがされるのだろうか。

アンコウの暮らす深海には、小さい時は雄で、成長すると雌に「性転換」する生物が他にもたくさん生息する。人間界にも、男性の身体で女性的？の心、あるいは女性の身体で男性的？の心を持つ人がいる（そもそも、心の性的差異に議論の余地は多くある）。異性を好きになることが当たり前とされているが、同性を好きになる人もいる。ただ、異性を好きになると決められてきた長い長い歴史の中で、なかなか市民権を得ることは難しい。そのことで生きにくい人たちがいる。そのことで差別を受けることがある。そのような人たちはLGBTと呼ばれているが、深海生物の生態について知ると、なんだかその表現すらも誇大広告のように思えてくる。なぜ、人はみな同じであるという点からスタートしてしまったのだろうか。なぜ人はみな同じ方向を向かなければならなかったのだろうか。

この本を読んだだけで、私たちの考え方というもの自然にできあがっていたはずなのに、どこか不自然さも持ち合わせているような気がしてならない。人間を含む生物には多様な生き方、ライフスタイルがあって当然なのだ。チューブワームから生活や生き方の速度に違いがあってもいいこと、ミツクリエナガチョウチンアンコウから男女の働き方に違いがあってもいいこと、深海生物から性の違いがあってもいいこと、その違いこそが生物の証であると知らされた。違いがあっても当然というよりはむしろ、同じであるはずがないというところからスタートすべきであろう。

ふと…

人はもともと同じであるはずがない（違っていても当然）からスタートしていたら、今の世の中はどうなっていたのだろうか。ゆっくり生活をする人、飛び回るような生活をする人、その間にはいろんなペースで生活をする人がいる。異性同士で結婚し子どもを育てる人、同性同士で結婚し養子を育てる人、結婚して子どもを持たない人、結婚しない人、いろんな人がいる。肌の白い人、黒い人、黄色い人、いろんな色の人がある。お箸を使って食事をする人、フォーク・ナイフ・スプーンを使う人、手で食事をする人がいる。みんなそれぞれという事実だけがそこにあったはずだ。「違う」という理由で人を馬鹿にすることも、蔑むことも、傷つけることもなかっただろう。「違い」は「違い」としてただそこにあるだけ。

我に返る…

差別はなぜ起こったのだろう。

戦争はなぜ起こったのだろう。

私たちの未来はどうなるのだろう。

ぜひ、気軽にこの本を手にとって読んでみてほしい。

開催報告 (2015年10月～2016年1月)

第96回 第9回立命館附属校 平和教育実践展示

会期：2015年10月11日(日)～12月18日(金)

立命館附属校の平和教育実践展示は2007年度に第1回を開催し、今回が9回目の実施となりました。この企画は、展示物を通じて初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することで、今日の小学生、中学生、高校生の平和や人権課題に対する意識を広く知ってもらおうとするものです。2015年度は下記の日程で開催しました。各校の展示の詳細は17頁をご覧ください。

[日程と展示内容]

- ① 立命館守山中学校・高等学校
会 期：2015年10月11日(日)～10月23日(金)
テーマ：立命館守山中・高の平和学習の取り組み
- ② 立命館小学校
会 期：2015年10月25日(日)～11月6日(金)
テーマ：5年生が考える「平和ポスター」
- ③ 立命館中学校・高等学校
会 期：2015年11月8日(日)～11月19日(木)
テーマ：立命館中高の「平和 沖縄・長崎」の取り組み
- ④ 立命館宇治中学校・高等学校
会 期：2015年11月21日(土)～12月4日(金)
テーマ：戦後70年を考える
- ⑤ 立命館慶祥中学校・高等学校
会 期：2015年12月6日(日)～12月18日(金)
テーマ：慶祥で平和と民主主義を学ぶ



展示の様子

第97回 奥山美由紀 写真展 「ディア・ジャパニーズ」

会期：2016年1月9日(土)～1月31日(日)
主催：オランダ公益財団法人 アジア太平洋戦争
日本関連史資料および学術連絡支援団体〔SOO〕
共催：立命館大学国際平和ミュージアム

1942年から3年半の間、日本の占領下に置かれていた旧オランダ領東インド（現インドネシア）には、

36万人以上の日本人が駐在していました。占領中、オランダ系インドネシア人男性は植民地兵にされ、女性は駐在している日本人用の事務所やカフェ、レストランで働いて生計を立てることもありました。

駐在中の日本人男性の中には、オランダ系インドネシア人女性と関係を持つ者もあり、その結果生まれた子どもは数千から数万人いたといわれています。彼らの多くは戦争が終わると現地に置き去りにされました。

インドネシア独立戦争中は、日系の子どもやその母親は差別されることが多く、過去の日本人との関係や子どもの素性を隠さざるを得ませんでした。オランダ独立期に母親の祖国であるオランダへ移り住みますが、そこでも旧敵国である日本にルーツを持つ子どもの存在は差別の対象となりました。

オランダ公益財団法人 アジア太平洋戦争 日本関連史資料および学術連絡支援団体〔SOO〕は、オランダと日本の戦後和解を民間から目指す活動をしています。その活動の一つに、日系オランダ人の父親捜しの支援があります。戦時中に生まれた日系オランダ人の多くは日本人の父親の存在を知りません。彼らは自らのルーツを知るために父親捜しをしています。

展示では、SOOの事務局を務めるオランダ在住カメラマン奥山美由紀さんが撮影した日系オランダ人のポートレートシリーズ40点を被写体の方々から取材した内容とともに紹介しました。彼らの静かな表情から、過去の辛い境遇、隠された存在であったことなど遙かオランダに残る戦争の傷跡について考えさせられる企画となりました。



展示の様子



会期中、1階メディア資料室に特設コーナーを設け、写真集「ディア・ジャパニーズ」をはじめ、関連図書を紹介しました

国際平和ミュージアムの授業利用状況

国際平和ミュージアムは1992年に開設し、2005年にリニューアルしました。地下1階の常設展示室は、日本の「一五年戦争」と「第二次世界大戦以降の戦争と平和」について展示し、戦争の実態を通して平和な世界のために何をしなければならないのかを考えます。2階フロアでは「平和をもとめて」というテーマで、世界中の様々な「暴力」とそれを取り除くための活動の様子を展示しています。1階には、メディア資料室があり、文献の検索・閲覧、AV資料の視聴ができます。

立命館で学ぶ方、働く方は無料で入館できます。授業や学習のさまざまな場面でご利用いただけます。

◆授業での利用状況

2015年度4月から12月末までの授業（附属校団体含む）での利用は、114クラス（団体）、5,335名にのぼります。ほとんどは授業単位で来館して見学する方式ですが、期間を定めて学生・生徒が各自で見学し、その後の研修旅行や授業内でのディスカッションの事前学習にも活用されています。

来館の時期としては、10月（31クラス）、7月（24クラス）が多い傾向にあります。

◆授業での活用法

授業での利用例をいくつか紹介いたします。

(1)新入生のオリエンテーションとして

このミュージアムは、立命館大学の教学理念を具現化した施設ですので、自校史教育の一環として見学いただけます。基礎演習クラスでのご見学にも最適です。今年度は、法学部とスポーツ健康科学部、文学部の1回生配当の小集団クラスのほぼ全クラスでご見学いただきました。ほかに産業社会学部スポーツ社会専攻のように一部の専攻だけが見学された学部もあります。

スポーツ健康科学部の基礎演習では、スポーツと健康について展示も交えて学芸員からの解説も実施しました。事前にご相談いただければこのような対応も可能です。

(2)授業の一環としての見学

歴史的事実を学ぶことは、どの分野の学問においても必要なバックグラウンドです。講義内容に直接的な関連がなくても、国際社会に視野を広げ、グローバルな視点や問題意識の醸成に役立つことでしょう。

毎年開催している世界報道写真展は、世界の「いま」を写真で切り取った展覧会です。写真のキャプションは日本語だけでなく英語でも掲出されており、英語の

授業で見学し、写真を題材に英語で討論をしたり英文レポート提出をするといった形で活用されています。

(3)レポートなど課題のテーマ

講義時間中での見学が難しいようでしたら、各自でミュージアムを見学しレポート提出を課すといった課題解決型授業として活用できます。今年度は「平和学入門」や文学部1回生配当科目の「リテラシー入門／研究入門」での見学がありました。また立命館宇治中学校では、研修旅行前に各自見学する事前学習として活用しました。

(4)所蔵図書・所蔵資料の活用

図書資料だけでなく、ミュージアムが所蔵する「もの資料」も、事前申し込みによって閲覧いただくことが可能です。特に学部高回生や研究科の学生には、他館で所蔵していない貴重な一次資料が身近にあることで、論文執筆に役立てていただけるでしょう。2016年4月からは収蔵資料データベースが稼働の予定です。

◆ご見学のお申し込みについて

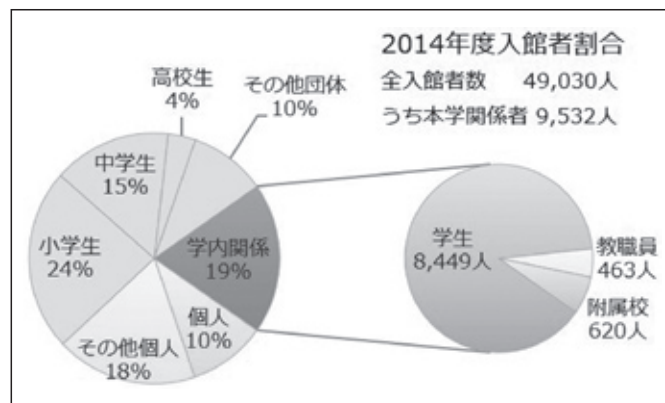
授業で見学利用する場合は、必ず事前に来館予約をしてください。

ご予約は、ご来館いただき、1階事務室の窓口で見学申込書をご提出いただくか、電話または申し込み用紙をダウンロードしていただき、必要事項をご記入の上、学内便・ファックスでご提出いただく方法があります。

時期により大変混み合うことがありますので、見学日時を調整させていただくことがあります。特に10月から11月にかけては、秋の観光シーズンということもあって修学旅行で来館する団体も多い時期となります。お早めに予約をお願いいたします。

ボランティアガイドの展示解説を希望する場合は2週間前までに予約が必要です。

詳しくは事務室までお尋ねください。



平和の缶バッジプレゼントキャンペーンについて



実施期間 10月1日(木)～12月25日(金)

2015年秋、国際平和ミュージアムでは広報課と協力して小・中学生を対象とした平和の缶バッジプレゼントキャンペーンを行いました。

毎年10月から11月には修学旅行などで多数の小・中学生がミュージアムを訪れます。展示を見学する中で、児童・生徒たちには色々な気付きや学びがありますが、戦後70年に当たる本年、来館した子どもたちがより深く平和について考え行動するきっかけとなるよう、小・中学生の来館が最も多い10月から、平和の缶バッジプレゼントを開始しました。

そして、計画を進める中で、あらゆる年代の方にも平和について今一度考えてもらおうと、小・中学生のみでなく来館した全ての方を対象にキャンペーンを拡げました。

来館者の皆様には、自分が平和のためにできる取り組みを「平和宣言」として記してもらい、それと交換に平和の缶バッジをお渡ししました。子どもたちはもちろん、全ての参加者の方に喜んで受け取っていただきました。

記入していただいた「平和宣言」は館内に掲示し、また掲示しきれない分は閲覧できるよう配置しました。参加いただいた方々には、他の参加者の「平和宣言」を見ることから、学びを深めることができる取り組みとなりました。

このような来館者へのプレゼントキャンペーンは初めての試みでしたが、缶バッジの配布を担当した学生スタッフからは次のような感想が聞かれました。

子どもたちに展示解説をするときは、一方的に教えるのではなく、自分で考える方向へ導くよう意識しました。子どもたちが書いた平和宣言を見ると、自分の説明がきちんと伝わっていること、そしてこちらの話したことを素直に受け止めているということが分かり、伝える責任の重さを改めて感じました。主観的な説明になっていないかといった、自分を振り返るきっかけにもなり、ミュージアムスタッフとしてのモチベーションの向上にもつながりました。バッジのデザインが英語のものが多かったので、子どもたちには一見して意味が分かりにくく説明を要した点が少し残念でしたが、多くの方が大変好意的にバッジを受け取ってくれて嬉しかったです。

「かわいいバッジが欲しい!」というきっかけから、展示を見て知ったことを反芻することにつながり、また他の参加者の「平和宣言」を見ることで「今日から自分が平和のために取り組むこと」へ思考を展開する機会ともなり、学びの定着もより深まったのではないのでしょうか。

また、この取り組みには来館者の皆様以外にも多くの方に参加いただき、その様子はミュージアムのホームページに随時掲載しました。

これからも、平和の缶バッジを手取るたびに、ミュージアムで見たこと・感じたことを思い出して平和に対する思いを深めていただければ幸いです。



バッジ配布数 約11,000個



平和宣言を書く子どもたち

2015年度 秋季特別展 戦後を語る70のカタチ

会 期：2015年10月20日(火)～12月13日(日)
 会 場：立命館大学国際平和ミュージアム1階
 中野記念ホール
 参 観 者：13,945名
 主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
 後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞社、読売新聞大阪本社

本展は戦後70年にちなみ、戦後という時代について考える際に重要な出来事の中から70件を選び、資料を通して紹介しました。展示の導入では、敗戦直後の焼け野原、テレビや洗濯機などの家電製品の普及、東京オリンピックや大阪万博など多くの人々の記憶の参照軸にされる出来事を紹介し、その上で、復興と成長の物語とは異なる戦後のカタチを振り返りました。

「植民地・占領地支配と戦後日本」は、引き揚げ、戦災孤児、戦後開拓、シベリア抑留、戦時死亡宣告、中国残留日本人など、戦後もまた大日本帝国の影響によって生存や生活が大きく翻弄された人々の存在があることを問いかけました。

「戦後日本と核と原子力」では、原爆投下やビキニ事件による被爆被害、原子力平和利用の議論、冷戦体制下での核戦争の恐怖、核兵器廃絶を求める平和運動の拡がり、福島第一原子力発電所事故などを通して戦後の核と原子力について考え、長崎で被爆した柱時計や、原水禁署名の束、第五福竜丸で使われていた筆記用具などの資料を展示しました。

そして「戦後世界の暴力と平和」では、各時期に日本社会が武力という問題とどう向き合ってきたか、東京裁判関連資料や、占領期の製品、ベトナム反戦運動関連資料、NGOによる海外での人権や構造的暴力是正への取り組み、SEALDsの活動などを通して紹介しました。出品資料の中には、BC級戦犯の資料など、初公開の資料もありました。

戦後は映像の時代でもあり、会場内では毎日映画社による1970年前後の「映像ニュース」、阪神淡路大震災の様子を伝える「市民が撮った震災映像アーカイブ」(一部)、三里塚闘争の様子を伝える映像、1950年代に海外移住促進のために作られた『ブラジルの印象』を上映しました。

そのほか、戦後70年間の日本人の平均体格の変化、子どもの名前の移り変わり、大学進学率の上昇などデータで変化を見るコーナーや、メディア資料室では、展示で紹介した内容の関連図書や映像を紹介するコーナーも設けました。



展示の様子1



展示の様子2

●関連映画上映会

『家族』(山田洋次監督 1970年公開・松竹)

日 時：2015年11月7日(土) 13:30～16:00
 会 場：立命館大学衣笠キャンパス充光館地階301教室
 司 会：田中聡(立命館大学国際平和ミュージアム副館長、立命館大学文学部教授)
 講 師：番匠健一(立命館大学生存学研究センター客員研究員)
 参加人数：48名

11月7日(土)には関連イベントとして、映画上映と作品解説を開催しました。

現在、「昔の映画」の映像の多くはデジタルリマスターですが、上映会では公開当時に映画館で使われた35ミリフィルムを用い、当時の人々と同じ映像を見ていただきました。上映に協力いただいた京都映画センターの一柳晋氏より、フィルム上映の説明もしていただきました。

『家族』は、長崎県伊王島から開拓のため北海道に向けて移住する家族の物語で、高度経済成長最中の日本を走り抜けるドキュメンタリータッチのロードムービーです。参観者からは、「山田作品は日本人として忘れがちなことを思い出させる」といった感想が寄せられました。

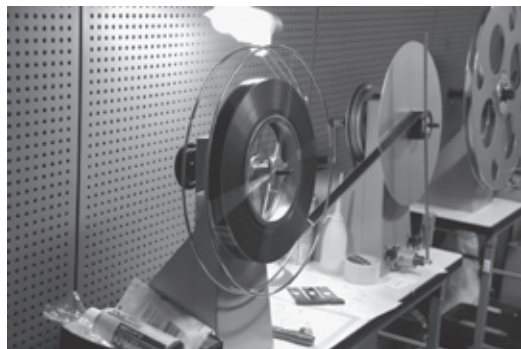
上映後、田中聡副館長司会のもと、番匠健一氏を迎

え「山田洋次映画における北海道と長崎」と題した作品解説を行いました。番匠氏は、山田作品の物語性やそこに映し出される1970年代日本の家族の姿に言及し、高度経済成長の陰でそれを眺めるだけであった人々の存在や、当時すでに矛盾が露呈していたにも関わらず主人公たちが北海道の開拓に希望を見出すラス



解説をする番匠健一氏

トシーンの是非をめぐる議論、そして他の山田作品全体を通して提起される、山田自身が経験した植民地支配と敗戦によってもたらされた引き揚げ者の故郷喪失感などについて論じ、戦後日本社会と山田作品への理解が深まる充実した内容となりました。



上映用 35 ミリフィルム

特別展見学者の感想より

- 今の世の中に対して、明確にメッセージ性を持った展示になっていたように感じました。よかったと思います。(20代、大学院生、大阪府)
- 戦後70年といえば、その70年が一つの視点(戦争後)で言われることが多いが、様々なことが起きていることがこの展示でわかります。70年間というものが実に長い期間であることもわかります。1945年から70年前といえば1875年ですから明治初期から近代日本が戦争へ至った期間とほぼ同じです。この展示は、いわゆる時系列には展示されていないので、みるものがある程度意識してみないと、色々あったのだなと終わってしまうかもしれません。私にとっては、そのとき、そのとき、国民にとって直面した問題がその当時の映像や写真、資料等で知ることができたのでよかったと思います。(60代、教育関係)
- 戦後史の流れの中で様々な資料を見られたことが大変興味深く感じました。特に、植民地・占領地支配について詳細な資料があり、難しい問題ですが、自分自身でも今後それらの事柄について考えてゆきたいと思

- ました。(20代、本学学生、京都市)
- 日本の戦後の歴史が凝縮されて、見やすかった。あらためて色々な出来事を学ぶ気付きとなった。(40代、会社員、神奈川県)
- 平和な日常のうちにふいに現れる戦争の記憶や戦時の出来事への問題提起…直接体験ではなく報道を通じて知る。でも泡のように日常にかすみ、消え、また形をかえて現れる。何か自分たちが見て見ぬふりをしようとすればできることをあえて呼びさますことが大切なのだと思います。あまりにも私たちが歴史をないがしろにしてきたのではないかということが今になって歴史認識問題につながっている気がしました。(40代、大阪府)
- 「戦後」という認識すらない世代だと思うので、自分たちがこういった歴史の中にいて生活しているのだと、今回の展示で改めて実感しました。過去を踏まえて、自分にどういったことができるのか考えて、関心を持ち続けたいと思いました。(20代、本学学生、京都市)

関連映画上映会参加者の感想より

- もっと多くの人が来てても良いくらい素晴らしい企画だと思います。35mmフィルムで上映するという事を、全面に押し出すべきなのではと思いました。卒業論文にも生かしたいと思いました。(20代、本学学生、京都市)
- 上映会『家族』はまさに私が生きてきた時代そのものの記録というか生きてきた歴史そのものの日本の姿でした。いろんな出来事をつみ重ねがあって現在に到っているのだなあとつくづく思いました。ずっと流れている家族愛、人間愛、かけがえのない生命はどんな時代にあってもずっと変わらぬ大切な価値なのだとはあらためて思いました。山田洋次さんも素晴らしい監督をしてられるし、又俳優さんたちも熱意

のある素敵な演技をしていられますね。心から感動しました。とかく悲しすぎる事件や事象の多い昨今ですが、常に人間本来の姿、人間本来の心のもち方、ありように立ち戻り一生をきちんと送ることができたらなあとは切望しています。いつも考えていますけど、やはり「愛」が一番大切なかなあって。良い企画をしていただきおかげ様で良い時間をもたせていただきました。どうもありがとうございました。これで又しばらくもちます。「特別展」は途中までしっかり見させていただきました。後の方も又見させていただきます。写真もすぐれていますし又説明や解説もわかりやすくとても意義のある展示だと思います。(70代以上、京都市)

世界平和アピール七人委員会 2015年講演会 「新しい戦前を作らないために ―戦後70年の世界と日本―」

2015年11月12日（木）、立命館大学国際平和ミュージアムは、世界平和アピール七人委員会と共同主催として「世界平和アピール七人委員会 2015年講演会『新しい戦前を作らないために―戦後70年の世界と日本―』」を開催しました。平日で授業日ではありましたが、本学の学生・教員をはじめ約250人の来聴がありました。

あいにくご来場されなかった土山秀夫さんはビデオメッセージで、池辺晋一郎さんはメッセージを高村さんが代読されることで、七人すべての委員のお話をうかがうことができました。前半の講演がモンテ・カセム国際平和ミュージアム館長の講演も含め、それぞれ熱のこもったお話であったため、残念ながら後半の討論は時間を短縮して、参加者からの質問・意見を整理して各委員が質問に1つずつ答えていただくだけという形での進行となりました。

閉会後、立命館生協による書籍販売にあわせ、2014年の講演会を中心に編集した『岐路に立つ日本』（あけび書房）などのサイン会もありました。参加者からは「時間が短いながら貴重なお話が聞けた」「平日なので参加者が少なく、もったいない」など講演会の内容については満足されたという感想を多数いただきました。

講演の前にミュージアムで開催中の特別展「戦後を語る70のカタチ」と常設展示をご覧くださいました。2階展示室見学後、学芸担当者より平和の缶バッジプレゼントの取り組みを紹介させていただきました。「平和宣言」をご記入いただき、缶バッジもお渡ししました。

世界平和アピール七人委員会とは

1955年11月11日、平凡社創設者・下中弥三郎氏の提唱によって結成された、ラッセル・アインシュタイン宣言の精神のもと、人道主義と平和主義のもとで武力によらず平和的手段による国際紛争解決を訴えて、世界に向けてアピールしている有志7人の会です。結成時の委員は下中氏のほかに、平塚らいてう氏や湯川秀樹氏、前田多門氏などが務め、その後も朝永振一郎氏や川端康成氏など名だたるメンバーが加入しています。最近では福島、長崎、東京（明治学院大学）で毎年11月に開催してきましたが、2015年は湯川英樹氏ゆかりの地である京都で講演会を開催することになりました。また、戦後70年、国連誕生70年、アジア・アフリカ諸国のバンドン会議、核兵器と戦争の廃絶を世界に訴えたラッセル・アインシュタイン宣言と世界平和アピール七人委員会の発足から60周年の大きな節目にあたります。

日 時：2015年11月12日（木） 13：30～17：00

会 場：立命館大学 衣笠キャンパス
以学館2号ホール

主 催：世界平和アピール七人委員会

共同主催：立命館大学国際平和ミュージアム

後 援：NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、
京都新聞、毎日新聞社、読売新聞社、時事
通信社、京都弁護士会、日本国際連合協会
京都本部

講演 共通テーマ

「戦後70年」における各委員のテーマ

土山 秀夫…継続は力なり

池内 了……科学者の軍事動員が始まっている！

高村 薫……野間宏に見る戦前の青春群像と

平成のSEALDs

大石 芳野…戦後70年：刻まれた傷（写真つき）

池辺 晋一郎…時は前に進む

武者小路 公秀…テロ国家を和解させる

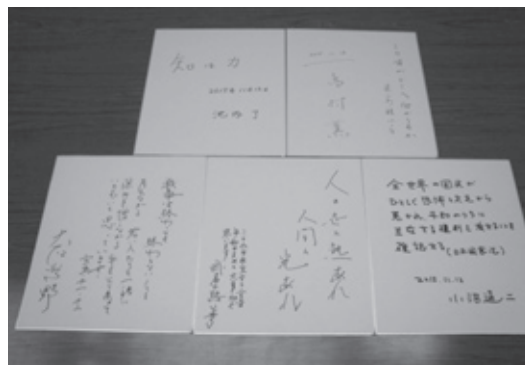
非暴力国家・日本

小沼 通二…戦争をしない世界への歩み

モンテ・カセム…ATOMS FOR PEACE REVISITED



左から池内さん、高村さん、大石さん、カセム館長、武者小路さん、小沼さん



講演会に来られた委員のみなさんから色紙にメッセージをいただきました

第22回日本平和博物館会議参加報告

2015年11月19日－20日に第22回日本平和博物館会議が川崎市平和館で開催されました。

初日の定例会では、戦後70年を迎える中で平和博物館を取り巻く情勢や、戦争体験の継承に関する討議や情報交換が活発に行われました。特に、非体験世代による戦争体験「継承」は今後の平和博物館に求められる各館共通の課題です。戦争体験者が非体験者を育てるひめゆり平和祈念資料館、ボランティアが体験者の証言を継承する「伝承者」養成に取り組む広島平和記念資料館、家族として被爆者と過ごした時間の中で引き継いだ体験について証言する「家族証言者」事業を進める長崎原爆資料館など、それぞれに異なるアプローチと課題や成果に大きな関心が寄せられました。

その後、日本平和博物館会議の戦後70年の共同事業として制作された「戦後70年共同展示パネル」を見学し、引き続き昨年展示リニューアルを行った川崎市平和館の常設展示を見学。限られた空間の中で、日清戦争から記述して日本の対外侵略の歴史を俯瞰する

構成や、現代的戦争の背景にある課題（メディアが戦争をあおる側面など）への鋭いアプローチが印象的であり、近年リニューアルを行った平和博物館の中でも傑出した展示でした。

また、2日目は、明治大学登戸平和教育研究所のフィールドワークが行われ、陸軍の登戸研究所跡地にあたる生田キャンパス内の戦争遺跡（消火栓や動物慰霊碑など）と館内を見学しました。登戸研究所についてはまだ謎も多いとのことですが、関係者が戦後、米軍施設に勤務した実態など、登戸研究所の戦後史に関する展開は、戦後70年にふさわしい充実した展示でした。



明治大学登戸平和教育研究所内の風船爆弾の模型

2015年度 第2回NGOワークショップ 「難民問題の解決に向けて～JVCの活動を基に考えよう～」

12月5日（土）、NGOワークショップ「難民問題の解決に向けて～JVCの活動を基に考えよう～」を開催し、17名の参加がありました。例年、国際平和ミュージアムでは、学生ミュージアムスタッフが主体的に企画・実施するNGOワークショップを開催しています。企画メンバーとなった学生たちは、2階常設展示室の第2展示室「平和をもとめて」で紹介している12団体の活動の中から、興味・関心のある団体について意見交換を重ね、依頼する団体を決定します。

2015年度後期は、日本国際ボランティアセンター（JVC）より、並木麻衣さんを講師に迎え、「難民について知る」「NGOによる支援とジレンマを知る」をテーマに、ワークショップを以下の内容でおこないました。

1. 導入

「難民について知る」 どのような人を難民と定義するのか、どの地域で発生しているのか、歴史的背景を踏まえつつ、地図やデータを基に解説。

「支援とジレンマ」 難民を支援する前に、難民が発生しないようにするには？本当に支援を必要としている人に届いているのか？難民に紛れている武装勢力側の人も支援することになっていないか？難民支援を嫌がる政府、市民団体に対しては強く出られないか？

2. グループディスカッション

難民について、支援活動について、自分の思うところ、疑問を3～4人のグループに分かれてディスカッション。

3. 発表とまとめ

各グループの代表が発表。講師が質問に答え、講評。

各グループとも活発にディスカッションし、笑いを交えながらのワークショップになりました。参加した学生から、「今、話題になっている難民のことを学べて良かった」「実際に支援にあたっている方の話を聞くことができて、より新しい視点が得られた」といった感想が寄せられました。企画した学生スタッフは準備から当日の運営にあたる中で多くのことを学んだようです。

この経験を、ミュージアム来館者への展示解説活動で、是非いかして欲しいと思います。



和やかにおこなわれたワークショップ

第62回「わだつみ像」前集会 —不戦の誓いを新たに—

第62回不戦のつどい「わだつみ像」前集会（主催：不戦のつどい実行委員会）が、2015年12月8日国際平和ミュージアムロビーで、7日に「嵐の中の母子像」前集会がびわこ・くさつキャンパス（BKC）で、4日に大阪いばらきキャンパス（OIC）にて開催されました。

戦後70年に当たる今年開催された衣笠キャンパスの「わだつみ像」前集会には、学生、教職員、関係者ら約150名が集まり、黙祷と献花を捧げました。不戦のつどい実行委員会の稲田隆浩委員長（学友会中央常任委員長／法学部4回生）からは、「過去に本学が積極的に戦地に学生を送り出した苦い経験を踏まえ、二度と学生を赴かせない決意と共に、現在の安保法制やISなどの情勢を見るにつけ、過去から学び未来について民主的に議論しこれからの平和について考えていくことが我々の義務である。」と訴えました。

続いて、学園を代表して吉田美喜夫総長より、「立命館憲章では『戦争の痛苦の体験を踏まえ、教学理念

を平和と民主主義とした。』とあるが、戦争中3,000名の本学学生が戦地に赴き1,000名が戦死、勤労学生も3,000名のうち愛知県豊川など7名が亡くなっていることを忘れてはならない。そのような歴史を知ること、それを継承することが大事である。戦後70年の節目の年に、安保法制立法化などの動きがあるが、一方でこれに反対する学生、研究者や若い母親の運動など民主主義の新しい可能性も生まれている。一人一人が個人として民主主義とは何か、平和の実現の課題などについて考え行動すること、そこに大学としての社会的・歴史的役割がある。」とご挨拶がありました。

不戦のつどい実行委員会の院生協議会連合、教職員組合、生活協同組合などからの献花に続き、国際平和ミュージアムからモンテ・カセム館長と安斎育郎名誉館長が揃ってわだつみ像に献花し、不戦と平和への誓いを新たにしました。



「わだつみ像」前で挨拶する稲田実行委員長



ご挨拶する吉田総長

わだつみ像台座「像と共に未来を守れ」

「未来を信じ未来に生きる。そこに青年の生命がある。

その貴い未来と生命を聖戦という名のもとに奪い去られた青年学徒のなげきと怒りともだえを象徴するのがこの像である。本郷新の制作。

なげけるか いかれるか はたもだせるか
きけ はてしなきわだつみのこえ

この戦歿学生記念像は廣く世にわだつみの像として知られている。

一九五三年十二月八日 立命館大学総長 末川博しるす」

戦後70年の節目にあたって平和への決意を問う

立命館大学国際平和ミュージアム運営委員

一貫教育部部長 田中 博

今年度は「戦後70年」にあたる節目の年であったため、立命館附属校が連携して、平和宣言を発表する取り組みを行いました。附属4高校の生徒会が中心となり、それぞれの学校での活動情報を交換するとともに、それらの経験から自分達の平和宣言をまとめました。生徒達はメール等を使って連絡を取りながら、年間10回ほどのTV会議による議論も行いました。また、平和学習合宿も企画し、多くのことを学ぶことができました。合宿では、ちょうどその時に開催されていた「戦争展」へ参加するとともに、モンテ・カセム館長や戦争体験者の方々からお話を聞かせていただく貴重な経験等も持たせていただきました。「戦後70年」は単に区切りがいいというだけでなく、戦時中に彼らと同じ年代であった若者が、85～90歳の高齢となられ、戦争体験を風化させてはいけないという大きな意味があります。これらの活動の中で学んだことを宣言にまとめ、ここからその精神を広く普及する仕事が続いています。自分達自身の行動が問われることとなります。

そのような中で、今年9回目の開催となりました立命館附属校平和教育実践展示が開催されました。各附属校の平和教育の実践を紹介する展示は、多くの皆様にご見学いただきました。ご参加いただきました方々、開催にあたりお世話になりました方々へ心より感謝を申し上げます。

10月11日～12月18日までの期間で、2週間ごとに以下の順序で各校の展示が行われました。内容を簡単に紹介します。

立命館守山中学校・高等学校

中2で取り組んだ「長崎APU平和研修」のまとめレポート展示、文化祭で作った「平和」をテーマにしたオブジェの展示並びにプロジェクションマッピングの放映、高3が取り組んだ「国際協力」での生徒作成プレゼンテーション資料の展示を行いました。

立命館小学校

5年生で実施した広島への宿泊体験学習で学んだ戦争、原子爆弾などに関わる「平和」を中心に、学校や友達関係などでの身の回りについても考え直し、広い意味での「平和」をテーマにした、5年生児童全員(120名)の平和ポスターを展示しました。

(各附属校による展示の様子)



立命館守山中学校・高等学校



立命館小学校



立命館中学校・高等学校



立命館宇治中学校・高等学校



立命館慶祥中学校・高等学校

立命館中学校・高等学校

中2で実施した沖縄平和研修の取り組みで作成したレポートの展示、スーパーグローバルハイスクール(SGH)事業の取り組みとして「長崎平和研修」「Rits Super Global Forum」の報告、中1のポスター、中2での国語だよりの展示を行いました。

立命館宇治中学校・高等学校

「戦後70年を考え未来の平和を考える」をテーマに、日中韓の3か国の生徒が歴史、未来の平和を考える「東アジア歴史キャンプ」報告、高2倫理「あの日から消えていったもの」、高2政経、高3グローバルシティズンシップ「生徒の考えた戦後70年談話」の報告を行いました。

立命館慶祥中学校・高等学校

朝日新聞社主催平和短歌コンクール「八月の歌」への中1応募作品、中学で取り組んだ戦後70年企画「北海道と戦争」、平和を考える立命祭(学校祭)の取り組み紹介、高校でのSGH取り組み紹介、また、中学美術からは「平和を表現したバルサタワー」の展示を行いました。

これらの取り組みを見学いただいた方々からのアンケートには以下のようなコメントをいただきました。「戦争に対する色々な資料やその悲惨さを表したビデオなど、勉強になりました」「現地の高校生とのディスカッションなどを通して多くを学んでいると感じました」「この年齢からたくさんのことを体験し、学べる環境は素晴らしいと思います」「子どもたちは大人が気づかない、忘れてしまいがちな多くのことに気づいていると感じました」

立命館では、附属高校の内3校が国からスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受けており、国際的な活躍を目指す生徒を育成する中で、平和について考えることが重視されています。子供時代に平和について深く考えることの重要性を実感しており、今後ともより充実した平和教育に取り組んでいきたいと考えています。皆様のご理解、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

韓国ノグンリ平和記念館との学術交流協定締結の調印式と記念講演会開催

学術交流協定調印式

立命館大学国際平和ミュージアムでは、アジア太平洋地域とりわけ東アジアにおける「和解と共生」をめざす平和博物館の学術交流活動を前進させ、日本・中国・韓国・ベトナム・ロシア（沿海州中心に）との交流・連携を進めていくことが重要な課題となっています。この間の成果と到達点を踏まえ、今後の展望の中に、韓国ノグンリ平和記念館との学術交流協定の締結を位置付け、学術交流の促進、資料収集の協力や資料の相互交換等、今後の相互交流を図っていくことになりました。

11月23日（月）、韓国ノグンリ平和記念館からチョン・ウド（鄭求燾）館長、キム・ヘヨン氏をお迎えし、国際平和ミュージアム会議室にて、学術交流協定調印式が執り行われました。チョン・ウド館長、モンテ・カセム館長からは、今次の協定が両館の今後の平和教育、平和研究に関する学術交流の一層の発展を期するものであり、歴史の記録・記憶の継承、人権を含む平和創造の面での様々な交流が期待されている旨のご挨拶がありました。



前列左より、国際平和ミュージアムモンテ・カセム館長、ノグンリ平和記念館チョン・ウド館長、キム・ヘヨン氏、学術交流協定調印式の列席者の皆様

記念講演会

協定調印式に引続き、「人権と平和のために－ノグンリ虐殺の真相を究明する活動－」と題して、チョン・ウド館長の講演会が開催されました。

老斤里（ノグンリ）事件とは、朝鮮戦争初期の1950年7月、ノグンリの京釜線鉄道及び双窟橋トンネル一帯において、アメリカ空軍機による空爆とアメリカ第1師団第7騎兵連隊による無差別攻撃により、

韓国の一般市民が犠牲になった事件であり、約400名の犠牲者の7割は女性と子ども、お年寄りでした。チョン館長自身がノグンリ事件の犠牲者遺族であり、幼い兄と姉を亡くしています。そして、父君チョン・ウニョ（鄭 殷溶）氏の50年以上に渡る粘り強い活動の結果（その後チョン・ウド氏も活動）、韓米両政府が歴史に閉ざされていたこの事件の調査委員会を設置し、当時のクリントン大統領の遺憾表明を引き出したことは大きな成果とも言えます。

ノグンリ事件に代表されるような、戦時下における一般市民への虐殺という悲劇的事件がその後も後を絶たないことから、これを普遍的な「人権」の問題として過去から学び教訓化する重要性が強調されました。また、これは被害者自身による歴史的記録・記憶（アーカイブ）活動として、膨大な証言記録を残したという点においても、意義があったということ、更に過去の歴史の整理・清算という面では、戦争下における人権侵害の実態について真相究明に向けて門戸を開く契機となった事件であったということ、韓国のプライドと主権をかけて被害者の名誉回復をめざしたということです。最後に「反米」ではなく、アイデンティティ確立の取り組みであるという意味では、日本国内における沖縄と同様の状況があるということをコメントされました。

この度、ノグンリ事件は人権、平和、命の問題として広げていくためにマンガとしても出版され、これを日本語で出版できればというご希望を述べられ、平和ミュージアムにこのマンガをご寄贈されました。参加者からは熱心な意見や質問と謝辞が述べられました。



チョン・ウド館長の講演の様子

米国 デイトン国際平和博物館

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 山根 和代

(立命館大学国際関係学部准教授)

デイトン国際平和博物館は、現在および未来の平和を達成するために暴力を使わないで平和的に紛争解決する考えを広めようと2004年に設立されました。それはJ. Frederick Arment氏、Ralph & Christine Dull夫妻、Steve Fryburg氏、そして Lisa Wolters氏によって創設されました。

この平和博物館では、非暴力主義に焦点を当てた様々な取り組み、活動、展示を通して地方、国内、世界において平和の文化の実現に貢献することを使命としています。その博物館は1876年に建てられた3階建ての建物にあり、ボランティアや民間の寄付によって支えられています。

展示の特徴として、平和や人権のために貢献した人々の展示があります。国際的に著名なマハトマ・ガンジー、キング牧師、マララ・ユスフザイさんのような人物だけではなく、地域の平和の実現のために活動している人々の展示もあります。

例えば良心的兵役拒否者のテッド・スタッド・ベーカーに関する展示があります。彼は1971年5月4日、ベトナムのディ・リンで亡くなりました。彼の死からちょうど44年目に当たる2015年4月26日、彼に関する展示を行いました。スタッド・ベーカーは高校を1964年に卒業し、兵役に登録しましたが、良心的兵役拒否者となることを要求しました。スタッド・ベーカーは兵役に代替する奉仕を終え、ベトナム・キリスト者・サービス(VNCS)に加わってディ・リンに移動し、そこで彼は少数民族であるモンタグナードを支援し、その農業改良事業に従事しました。1971年4月26日、ボランティアの仲間と結婚し、3年目の奉仕の契約にサインした時、VNCS奉仕団に対する攻撃で彼は殺害されてしまいました。

彼の兄弟が展示の開会式とピース・ヒーロー・ウォークに参加しました。ピース・ヒーロー・ウォークの目的は、平和のヒーローたちの物語を顕彰し、平和主義者の新しい世代を鼓舞することです。

展示では、スタッド・ベーカーがベトナムで弾いていたギター、40ミリの薬莢(VNCSボランティア事務所に対する攻撃で用いられたものと類似のもの)の形に似せて作られた花瓶、そしてミュージアムの訪問者に彼の生き方を伝える展示パネルがあります。展示室にある小型テレビからはウェブサイトにはアクセスでき、ホームページではバーチャルな部分の展示を見ることができます。詳細は「平和のための博物館国際ネットワーク」(INMP)のホームページで読むことができます。(通信第11号)



テッド・スタッド・ベーカー氏

またこの平和博物館では、環境問題に焦点を当てています。例えばデイトン生まれで修道女のドロシー・スタングに関する展示があります。彼女は熱帯雨林を持続的に使用し、貧しい農民を支援するために、アマゾンに伐採人、裕福な牛の牧場主、大豆生産者から守るために活動しました。しかし彼女は2005年2月12日にアマゾンの開発者が雇ったギャングによって殺されました。彼女は死後2008年に国連人権賞を受賞しました。



ドロシー・スタング氏

このように平和と人権のために活動した人々の展示や、環境問題を考えるための展示がされています。

開館時間：水曜日から日曜日の午後1時から5時まで

T E L : 937-227-3223

F A X : 937-224-2713

館 長 : Jerry Leggett, Executive Director

住 所 : 208 W. Monument, Dayton OH 45402

メールアドレス : admin@daytonpeacemuseum.org

http://www.daytonpeacemuseum.org/#citayofpeace



デイトン国際平和博物館の展示(環境問題)



デイトン国際平和博物館の展示：平和のための英雄たち

ガイドは橋渡し:「過去と現在の間」 および「ミュージアムと参観者の間」

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 森田 喜久男

先般、ある大学生のグループをガイドした時、最後に「何故ボランティア・ガイドになったのですか？」と尋ねられて一寸思案の末、次のように答えました。「会社定年後も何らかの形で社会的貢献をしようと思ったからです」と。しかし、数年間ガイドを実践してみて当初の気楽な気持ちでやれば何とかなるという甘い幻想は打ち砕かれ、日々ガイドとしての社会的活動の重さ、深さを体感しています。

平和ミュージアムのボランティアガイドに参画始めて約4年になります。私は民間会社で技術者として仕事をしてきましたが、その間社会的問題に関心はあるものの社会的な活動との接点は限られていました。定年後何らかの社会的貢献をと考えていた頃、たまたま日本平和学会の縁で立命館平和ミュージアムを初めて見学した時の印象が強烈に頭に焼きついていて、大学がこのような大規模な平和に関する博物館を保有するのはどのような理念に基づいているのかについて更に知りたいと思っていました。その後しばらくしてボランティア・ガイド養成講座を受講し、晴れてガイドに登録して戴き活動を開始しました。本ミュージアムの理念を考えるに、展示の中に「立命館と15年戦争」コーナーがあり、立命館大学も昭和の戦争の時代には戦争協力の道を歩んで多くの学生を戦場に送りだし尊い命を失った悲痛な経験から反省し、戦後は「平和と民主主義」を大学教育の理念とした、と説明されています。これらの経緯や考え方は養成講座において丁寧な説明を受け、その後ガイドを重ねる毎に益々認識を深めている所です。

2015年の夏は政治および社会を巡って重大な変化点であったと言えるかと思います。戦後70年談話、安保法制の強行採決、それに関係する若者たちのSEALDs運動、18歳選挙権そして世界に眼を向けるとシリア内戦に伴って発生した膨大な難民問題など、戦後における社会秩序が崩壊していくような様相を示しており、「人権とは何だ」、「民主主義とは何だ」と根源的な問いかけがなされています。しかしそれらの中から新しい動きも色々芽生えてきた様に感じられます。これらの現代の社会情勢の動向および課題を読み解く

上で、ミュージアムの15年戦争と現代の戦争などの歴史的展示および平和への努力の知見は様々なヒントを与えてくれます。ミュージアムには小・中・高校生が沢山見学に訪れます。小学生などからは「なぜ戦争になったの？」と率直な質問をよく聞きますし、また高校生は選挙権が18歳に引き下げられた事に対して、彼女たちも従来以上に自覚を持って現代社会を見て行くようになると思います。ミュージアム及び我々ガイドは若者たちに対して、歴史を書物だけでなく肌身で感じる事を通して、平和を考え、夢と希望を語り第一歩を踏み出す手助けが出来れば良いなと思っています。

平和ミュージアムのガイドの基本は、「展示物に即して、事実即して、魅力的にそして禁欲的に伝える」ことであり、見学者に対する目標は、「見て、感じて、考えて、その一歩を踏み出そう」、即ち見学者には心に残る印象を残し、ミュージアムに来てよかった、僕も私も平和について考えてみようという気持ちを持って貰えば大変喜ばしいと思います。歴史と現在、また展示物と参観者への橋渡しがガイドの役割であり、見学者にはこれらの歴史的事実と現代の諸問題の関連について、歴史を鑑として現代を見る姿勢を持って貰えると良いかと常々思っています。そのためにはガイドも常々学習し、印象に残るガイドを心がけねばなりません。ミュージアム展示は現代史全般に亘っているため全ての分野を網羅するのはかなりの困難が伴います。最初はガイドブックや各コーナーの説明文、写真など全般的に学習しましたが、説明文の背景あるいは行間を興味深く解説するにはそれぞれ個別の深い知識と理解が必要になってきます。例えば山本宣治のデスマスクを説明する時には、彼の活動経過や生い立ちまでも含め治安維持法の脅威また当時の右翼の暗躍など色々エピソードを交えれば印象深くなりますし、平和友の会旅行で訪問した信州にある山宣の石碑のいわれも交えれば参考になります。最近ミュージアムを訪れる外国人も増えています。お互いの歴史に対する認識の相違、また平和に対するアプローチ等様々な問題についてコミュニケーションを重ねて行きたいと考えています。

常設展示見学者の感想

(2015年6月～
2015年12月)

今まさに憲法の価値観が危機的状況に置かれている中で、戦争とは何か、戦争によって一人一人の生活、人生がどうなるのかといったことを実感として体験できる。

60代 兵庫県

初めてこのミュージアムを見学したのですが、分かりやすい展示解説と日本の戦争を「加害面と被害面の両面」の展示がすばらしいと思います。初めて知ったこともたくさんありました。京都にも空襲があったこと、原爆投下の可能性があったことなどです。知ることは大切です。日本が二度と戦争をしないために一人でも多くの人がこのミュージアムを見学してほしいです。

20代 岐阜県

化学兵器の悲惨さが改めて分かった。戦争は二度としてはいけないと思った。

高校生 10代 京都府

今がすごく平和だと強く感じました。昔の戦争はすごくおそろしいのだなと思いました。もっと戦争について知りたいと思いました。戦争で新しく分かったことがあったらここにも展示してほしいと思います。

小学生 10代 三重県

私も、平和や戦争について考えようと思いました。過去と向きあっているのはとてもステキなことだと思いました。私にとってあたりまえの日常が、本当はとてもむずかしいことだと分かりました。

小学生 10代 三重県

色々な面において詳しく説明がされており、12月に行く修学旅行前の良い勉強になることがたくさん展示されていた。

高校生 10代 愛知県

次はもっとゆっくり見たい。
年5～6回は2日予定で京都に来ているので、ホテルを近くに変えてみようと思います。

自営業 60代 神奈川県

学校に帰ったら、戦争のことについて意見文をかきます。その時につかう内容がとてもたくさんみつられてとても良かったし、実際に当時の家の中に入れたりできてとても良かったです。

中学生 10代 兵庫県

大変勇気付けられました。共に平和運動に取り組みましょう。

40代 香川県

戦争中にあったものなどから、戦争のつらさをあらためて思いしらされた。

中学生 10代 神奈川県

昨年の秘密法案や朝日新聞の攻撃、おそろしくてたまりません。ここへきて、ここのあたりまえのことをたんたんと展示されている様子に支えられます。ここがこのままありつづけられますように。

戦争が終わって70年。どういう経過でこの戦争になっていったのか年表をみておそろしくなりました。ゆるゆるとひとつずつ進められていたのですね。今も戦前といわれる時代でなければと思います。15年戦争の前には世界恐慌があったのだとあらためて知りました。国民ナンパー制も徴兵制につながるものなのかもしれませんね。

教員 50代 兵庫県

飛行機の展示もあったらいいなと思いました。物から平和、戦争について感じる事ができました。

20代 大学生 山口県

前回初めて来館し、内容が素晴らしかったので再度来館しました。「国を守る」という言葉は聞こえは大変いい言葉です。「国を守る」ためには単に物理的powerだけではなく様々な手法が存在しています。憲法9条の平和主義も、国を守るための素晴らしい手法の一つです。実際に軍事力の行使が起きた時に、一人一人の国民の人生、暮らしにどのような影響が出てくるのかということをごちらのミュージアムではうまく表現されていると思います。最初に徴兵制についての説明があり、軍隊がどういうものなのか、徴兵制が一人一人の人生にどう関わってくるのかがよく表現されていると思いました。

もう少し充実して欲しい点としては「死亡告知書」の展示です。大事に育ててきた子どもが、一片の紙切れになって帰って来るのですが、死亡がどのように確認され、どのような経路で遺族に伝えられたのかをもう少し詳しく説明があればと思います。

60代 兵庫県

自分の知らなかった事や、理解できずにいた部分が解消されてすごくよかった。まだ少し見ていない所もあったので、もう一度しっかり見たいと思いました。

中学生 10代 兵庫県

説明文をいろいろな言語を追加した方がいいと思います。細かいところが日本語だけだったリムービーも日本語だけなので、字幕を入れるなど海外の人も見れるようにしたほうがいいと思います。

歴史を見れたのはとても良かったです。しかし、このミュージアムがあることを知っている人が少ないと思います。もっとアピールして世に知らせてほしいです。

20代 京都府

※掲載にあたり一部の表現を改めました

2015年4月
～2015年12月
入館者状況

◎開館日数

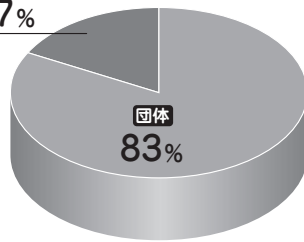
222日

◎オープン後常設展入館者数累計

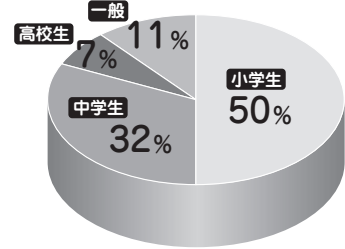
980,345名

<有料団体・個人入館者状況>

個人 17%



<有料団体入館者数状況>



2015年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	人数計(名)
総入館者数/開館日数		1,670/25	6,926/27	4,042/25	3,634/27	2,762/26	3,985/20	9,001/27	7,229/24	4,475/21	43,724/222
特別展	春季特別展 『山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」』	会期：5/3～7/4									9,692
	特別展 「世界報道写真展2015 -WORLD PRESS PHOTO 15-」	会期：9/9～10/4									5,182
	京都 (立命館大学衣笠キャンパス 中野記念ホール)	会期：10/6～10/18									1,466
	滋賀 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス エポックホール)	会期：10/21～11/4									2,545
	大分 (立命館アジア太平洋大学 コンベンションホール)	会期：10/20～12/13									13,945
	秋季特別展 「戦後を語る70のカタチ」										32,830
	小 計										
特別企画展示	無言館／京都館いのちの画室 開設10周年企画 「手島守之輔・伊藤守正一ふたりの被爆画学生の絵－展」 (国際平和ミュージアム ミニ企画展示室) 会期：7/1～8/25										—
ミニ企画展示	第92回ミニ企画展示 医の倫理－過去・現在・未来－ ～日本医学会総会 2015関西に向けて～	会期：4/2～4/14									—
	第93回ミニ企画展示 絶望の島から希望の島へ「クリオン島」－ハンセン病と差別の中に生きる人々－	会期：4/19～5/24									—
	第94回ミニ企画展示 日本平和博物館会議 戦後70年共同展示	会期：6/3～6/24									—
	第95回ミニ企画展示 放射能が降ってくる－ヒキニ事件と科学者西脇安	会期：9/12～9/30									—
	第96回ミニ企画展示 第9回立命館附属校平和教育実践展示 (守山、小学校、長岡京、宇治、慶祥)	会期：10/11～12/18									—
	第97回ミニ企画展示 奥山美由紀写真展 ディア・ジャパニーズ 戦後70年。オランダで「日本人」たちに会った。	会期：1/9～1/31									—
講演会 ほか	山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」講演会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (5/3)										50
	「戦後世代の私が、なぜ戦争体験者の証言を伝えたいのか」 講師：山本宗補氏 (フォトジャーナリスト)										
	山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」ギャラリートーク (国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (5/3)										45
	講師：山本宗補氏 (フォトジャーナリスト)										
	山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」講演会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (5/30)										47
	「加害と被害の重層構造－日本人の戦争体験をとらえ直す」 講師：林 博史氏 (関東学院大学教授)										
	山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」ギャラリートーク (国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (5/30)										30
	講師：山本宗補氏 (フォトジャーナリスト)										
	山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」ギャラリートーク (国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (6/16)										41
	講師：山本宗補氏 (フォトジャーナリスト)										
	ボランティアガイド学習会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (5/16)										30
	「東京大空襲を中心とする空襲について－この間の調査の成果を中心に」 講師：山辺昌彦氏 (東京大空襲・戦災資料センター主任研究員・学芸員)										
	戦後70周年記念国際学術シンポジウム「欧州連合司法裁判所の役割」(後援) (国際平和ミュージアム 2階会議室) (5/22)										55
	「欧州連合司法裁判所判例が国内法に及ぼす影響」										
	講師：ロルフ・シュトゥルナー (フライブルク大学法学部教授)										
	NGOワークショップ あなたのお金どこへ行く？ ～私たちができる平和創造のための出資～ (6/19)										24
	講師：田中 優氏 (未来バンク事業組合理事長)										
	ボランティアガイド学習交流会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (7/4)										44
	「立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動することパート3」 講師：安斎育郎名誉館長										
	親子の平和イベント ～「へいわ」ってなに？2015～ (国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (7/26)										86
	創作劇「ぞうのはなし」、「ムッチャんの影絵劇」、紙芝居、理科・図工 (国際平和ミュージアム 2階会議室)										
	平成27年茨城市非核平和展 みんなで考えよう世界の平和 (茨城市立中央図書館) (7/28～8/2)										オープン
	一貫出教材「さいころくん」を通して見る世界－										
	小学校・中学校教員対象ミュージアム下見見学会 (6日間・7/29、7/30、8/18、8/19、8/20、8/21)										106
	声に出す平和への祈り ～伝えよう未来へ、平和の守り手として～ (国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (8/15)										60
	朗読とスライド上映										
	立命館土曜講座 歴史に学ぶ、「戦争の気配」の感じ方 (以学館 1号ホール) (8/22)										672
	講師：加藤 陽子氏 (東京大学文学部教授)										
	立命館土曜講座 永続敗戦レジームと戦後の終わり (以学館 1号ホール) (8/29)										471
	講師：白井 聡氏 (京都精華大学人文学部専任講師)										
	世界報道写真展2015開催記念講演 (以学館 2号ホール) (9/19)										110
	「報道写真家の仕事」－マス・メディアの伝ええない「真実」沖縄・辺野古、高江の現状－										
	講師：森住 卓氏 (フォトジャーナリスト)										
	世界報道写真展2015関連企画 レクチャー&コンサート										
	ワードコンサートと講演会 ～レバノンから遠く離れて～										
	講演：ワエル・クデ氏 ウード演奏：ヤン・ピタール氏、ワエル・クデ氏、仲野麻紀氏										
	【京都会場】										
	【滋賀会場】										
	秋季特別展 「戦後を語る70のカタチ」関連企画										
	平和の缶バッチプレゼントキャンペーン (国際平和ミュージアム 2階受付等) (10/1～12/13)										—
	映画上映会「家族」 (充光館 地階301教室) (11/7)										48
	世界平和アピール七人委員会2015年講演会 (以学館 2号ホール) (11/12)										250
	新しい戦前を作らないために－戦後70年の世界と日本－										
	講師：土山 秀夫氏 (長崎大学名誉教授：ビデオレター)、池内 了氏 (名古屋大学名誉教授)、高村 薫氏 (作家)、大石 芳野氏 (写真家)、池辺 晋一郎氏 (作曲家：代読)、武者小路 公秀氏 (国際政治学者)、小沼 通二氏 (慶應義塾大学名誉教授)、モンテ・カセム (立命館大学国際平和ミュージアム館長)										
	韓国ノグンリ平和記念館と立命館大学国際平和ミュージアムとの学術交流協定締結調印式 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (11/23)										19
	韓国ノグンリ平和記念館と立命館大学国際平和ミュージアムとの学術交流協定締結記念講演会 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (11/23)										31
	「人権と平和のために」－ノグンリ虐殺の真相を究明する活動－										
	講師：チョン・クド氏 (ノグンリ平和記念館館長)										
	NGOワークショップ 難民問題の解決に向けて ～JVCの活動を基に考えよう～ (国際平和ミュージアム 2階会議室) (12/5)										17
	講師：並木 麻衣氏 (JVC (特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター))										
	小 計										2,363

編集
後記

第2次世界大戦から70年目の節目となる昨年11月30日、マンガ家の水木しげるさんが亡くなりました(享年93歳)。氏は1943年に召集され、ニューギニアのジャングルの中で左腕を失う重傷を負って復員した後、戦後の日本を代表するマンガ家となりました。『ゲゲゲの鬼太郎』など、人間のすぐ傍にある妖怪や精霊の世界をおどろおどろしく、どこかコミカルに描いた氏の作品は数世代にわたって読み継がれ、いまでも幅広い読者に愛されています。

亡くなる2ヶ月前、水木さんが出征前に書いていた手記が公刊されました(荒俣宏との共著「戦争と読書 水木しげるの出征前手記」角川新書)。鳥取連隊への入隊が迫るなか、宗教や哲学へ傾倒し、画家になる夢が記されており、氏もまた平和ミュージアム2階の「無言館分室」に作品が展示されている戦没画学生たちと同じく、「人を一塊の土くれにする時代」(1942年10月6日手記)に向き合っていた若者の一人であったという事実、改めて気づかされます。

戦後、水木さんは戦場での記憶と向き合い続け、過酷な実体験をベースとした戦争マンガを数多く発表し、個人の尊厳を顧みない軍隊という組織の理不尽について語っています。1979年、原子力発電所の下請け労働者に関するルポへの挿画を依頼された氏は、「まるで戦場のようだな」といい、巨大なパイプがまるで密林のように入り組んだプラントの中で働く作業員の姿を描きました(堀江邦夫『福島原発の闇 原発下請け労働者の現実』朝日新聞出版、2011年再刊)。水木さんが体験を通じて会得した「平和」とは、どんな人でも、よく寝ておかっぱいっばい食べ、のんびりと怠け人生を送れることでした。それを侵すものへの怒りが、氏を生涯突き動かしていたように感じます。 田中 聡

※本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はご遠慮ください

ミュージアムインフォメーション

特別展

KYOTOGRAPHIE共同企画

WILL: 意志、遺言、そして未来—報道写真家・福島菊次郎

立命館大学国際平和ミュージアム会場

会 期: 2016年4月23日(土)~5月29日(日)

※毎週金曜日はFriday Night Museumのため、特別展のみ19:00まで延長開館(入館は18:30まで)

会 場: 立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

休 館 日: 月曜日、4月30日(土)、5月6日(金)

参 観 料: 大人400円(350円)、中・高生300円(250円)、小学生200円(150円)

※常設展もあわせてご覧いただけます。上記()内は20名以上の団体料金です。

※「KYOTOGRAPHIEパスポート」提示で1回のみ無料です。

ただし、常設展をご覧いただく場合には参観料をお支払いください。

※5月14日(土)・15日(日)は、国際博物館の日を記念して無料公開です。

主 催: 立命館大学国際平和ミュージアム

共同企画: KYOTOGRAPHIE実行委員会

後 援: 京都府、京都府教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、KBS京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞社(予定)



福島菊次郎/共同通信イメージズ

敗戦直後、広島取材中に会った原爆症に苦しむ家族の姿を10年にわたり撮り続けた作品をきっかけとして報道写真の世界へ入った福島菊次郎は、三里塚闘争、ベトナム反戦市民運動、全共闘運動、自衛隊と兵器産業、公害問題など多岐に渡るテーマで激動する戦後の日本を写真に収めてきました。権力に迎合しないことを信念に撮り続けた写真は、戦後の日本が歩んできた道、残してきた課題を私たちに伝えています。

関連企画

●映画上映会&監督トーク ※参加無料、申込不要

「ニッポンの嘘 報道写真家 福島菊次郎90歳」

(監督: 長谷川三郎、製作: Documentary Japan. 104 co ltd. 2012年)

日 時: 5月14日(土) 13:30~16:00 会 場: 平井嘉一郎記念図書館 1階ミニシアター

同時開催 堀川御池ギャラリー会場

会 期: 2016年4月23日(土)~5月22日(日) 月曜休館 開館時間: 11:00~19:00

主 催: KYOTOGRAPHIE実行委員会



KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2016

京都市内の歴史的建造物、町家、文化施設など10数箇所を会場に開催する国際的な写真祭です。4回目を迎えた今年は「Circle of Life いのちの環(わ)」をテーマに国内外の作家が参加します。

世界報道写真展2016—WORLD PRESS PHOTO 16—

京都会場 会 期: 6月3日(金)~6月25日(土)(立命館大学国際平和ミュージアム)

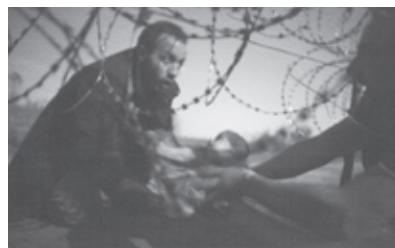
滋賀会場 会 期: 6月27日(月)~7月8日(金)(立命館大学びわこ・くさつキャンパス)

大分会場 会 期: 7月11日(月)~7月24日(日)(立命館アジア太平洋大学)

※京都会場は毎週金曜日はFriday Night Museumのため、特別展のみ19:00まで延長開館(入館は18:30まで)

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品で構成した写真展で、今年で59回目を迎えます。立命館大学では、1995年より毎年開催しています。

この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真は、人々に現実を強く訴える力を持っています。世界の現状を知り、いま一度、平和とは何かを考えるきっかけにしたいதாகたく開催するものです。



「世界報道写真大賞」
ウォーレン・リチャードソン(豪)、2015年8月28日撮影
セルビアとハンガリーの国境を越えようとする難民の男性と子ども。国境の有刺鉄線付きフェンスができあがる前に、ハンガリー側へ渡ろうとする群衆の中にいた。

●詳細はホームページでお知らせいたします。

ミュージアムインフォメーション

第99回ミニ企画展示

●熟覧—メディア資料室への誘い—

会期：2016年4月1日(金)～4月22日(金)
ミュージアム図書室の魅力を収蔵する図書/資料や研究実績を通して紹介します。

第100回ミニ企画展示

●満州報国農場とは何だったのか—東京農大湖北農場を中心に—

会期：2016年4月29日(金)～5月29日(日)
主催：「東京農業大学満州報国農場の記憶」展実行委員会
満州国崩壊2年前の1943年、急遽、閣議決定により設置が決められた報国農場の悲劇に至る真相に迫ります。



満州湖北農場殉難者慰霊碑
(東京農業大学世田谷キャンパス)

第101回ミニ企画展示

●遺品の語る沖縄戦

会期：2016年6月4日(土)～6月26日(日) 主催：国吉勇氏援会
沖縄戦の遺骨・遺品収集を50年以上続ける国吉勇氏所蔵の資料とその活動紹介を通して平和について考えます。

夏休み親子企画「へいわ」ってなに??2016

2016年7月24日(日)
夏休みに親子で一緒に見て・感じて・考えて! 平和について学びましょう!! 平和について、戦争について、世界で今起きていることについて、わかりやすく学び、平和について親子で考えていただく機会となりますよう、開催いたします。



2015年度夏休み親子企画の様子

教員下見見学会

2016年7月27日(水)～29日(金)、8月17日(水)～19日(金)

※参加状況により開催日を変更する場合があります。

夏休みに小学校・中学校の先生方を対象として下見見学会(無料)を開催いたします。京都への修学旅行、遠足、校外学習、地域探検等、様々な目的に合わせたミュージアムへの団体見学が可能です。見学会では、平和についての講義、学習教材キット紹介、展示室とガイド解説の紹介、個別相談会を行います。

〈下見見学会プログラム〉

平和講義

ガイド付
展示見学例

教材キット
紹介

個別
相談会

「平和ってなに色?」一字で表す平和へのメッセージ

会期：2016年10月27日(木)～11月3日(木・祝)

2005年文字・活字文化振興法の施行により、10月27日は「文字・活字文化の日」と制定されました。文字・活字文化についての関心と理解を深めていただくため、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所と連携して、文字・活字と、平和を楽しく学べる企画を行います。

特別パネル展示

●ドイツ統一への道

会期：2016年3月27日(日)～4月10日(日)
会場：中野記念ホール
主催：大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館
後援：立命館大学国際平和ミュージアム
ドイツ再統一から25年目にあたり、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館より提供されたドイツ統一への経緯を紹介する写真パネル(解説付)20枚を展示します。

OICライブラリー特別企画展示

●スポーツと平和—変容していくスポーツの持つ力—

会 期：2016年7月1日(金)～10月31日(月)

会 場：立命館大学大阪いばらきキャンパス

B棟2階 OICライブラリー展示室

企画：立命館大学図書館 協力：立命館大学国際平和ミュージアム
健康維持や娯楽、競技として親しみ、国際平和を促す原動力となるスポーツですが、十五年戦争当時は、国力増強など戦争のために利用されることがありました。本展は、オリンピック開催年にちなみ、「スポーツと平和」をテーマに開催します。

※詳細は立命館大学図書ホームページをご確認ください。

第23巻第3号(通巻67号) 2016年3月4日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行

立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>